真・恋姫?無双　～小覇王伝～

金魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫？無双　～小覇王伝～

【Ｎコード】
Ｎ２８０５Ｚ

【作者名】
金魂

【あらすじ】
江東の虎、孫堅の嫡男に転生し僅か１歳で戦場デビューと衝撃的な事が続き若干転生したことを忘れかけている孫策こと小狼がおぼろげな前世の記憶と若干チートじみている勘と身体能力を活かし激動の三国時代を生きる！！

この小説は金さんの初投稿作品です。
金さんが卒研等のストレスから逃げるため勢いで書いたものです。
不定期です。拙い分で誤字があります。応援はされるとモチベーシ

ョンが上がり調子をこく可能性があります。あと、雪蓮ファンごめんなさい

プロローグ

砂塵が舞い散る荒野
怒号轟く戦場
血飛沫まき散らす人
俺はこの地獄のような光景を幼い時から数え切れないほど見て来ている

と言うのも、俺の母の教育方針で「孫武の子孫たるもの戦上手たれ」と戦場の機微を読めるようになる様にと乳飲み子の時分から母に背負われ戦場を転戦していた

戦場デビュー僅か1歳
2歳にして渡り歩いた？戦場は２０を超え
４歳から剣術やら弓術とうとう武術を学び始め
６歳にはそこらの兵士では敵わないほどの成長を見せていた
８歳にして将デビューを果たした
と、なぜ俺が自我にも目覚めていないであろう赤子の時の記憶があるのかと言うと
「堅殿、敵前線が崩れましたぞ」

と少しばかり昔を思い出しているうちに戦局はこちらに傾いたようだ。

「今が好機ね・・・豹、祭、小狼追撃するわよ！しっかり付いてきなさい！！」

「「「御意！」」」

「孫呉の勇士たちよ！！我に続けー」

お袋が総攻撃の号令をかけ真っ先に先陣を切る

その後を、豹と祭と呼ばれた女性二人が続く

と、俺も遅れるわけには行かない

頬を軽くたたき、その痛みを持って意識を引き締める

母から貰った古錠刀を背に背負った鞘から抜き放つ

そして、先を行く母孫堅の後を追うため馬の横腹を軽くける

未だ遠いその背に追いつくために。

俺こと孫策　伯符　、１０歳は転生者である

第1話（前書き）

勢いで書いただけなので、お見苦しいと思いますがどうぞよろしく

第1話

俺こと孫策伯符は転生者である。

と言っても、生前の事はふとした時に思い出す程度で別段思い出したいとも思わない。

と言うのも1歳にして戦場デビューは伊達ではなく、それはもう前世の記憶をふっ飛ばすぐらいのインパクトがあった。

想像してほしい

首が座はすわったが意思表示は未だ泣き叫ぶことしかできない赤ちゃんである俺

寝て食って所ン便をもらし食事という羞恥プレイの日々

いつも道理、美人の母親にあやされ、頬笑みをたたえたお父親に見守られ眠りにつく明日も同じことの繰り返しと退屈な赤ちゃんライフが一変

きずいた時には戦場のど真ん中

降り注ぎ矢の雨

吹き飛ぶ生首

血も滴る良い母

あ、滴ってるのは敵の返り血ね

そりゃーもうとんでもない衝撃だよ！！

前世の記憶とかそりゃ盛大に吹き飛んだよ！！

そこからは、我慢との戦いだった

腹が減っても泣かず、所ン便したくても我慢し、一生懸命母の気お逸らさないよう我慢した

赤ちゃんの当たり前の行動が即刻ＤＥＡＤにつながるからだ

しかも、時たま母の背に居る俺を狙ってくる屑もいるし、弓矢も普通に飛んでくる

御蔭で気配の察知とか勘とかそりゃもう鋭くなったね

２歳ぐらいからは馬に乗る時は普通に母の前に座り戦場に出ていたと言うか、戦場に出るのが当たり前だったし

それに、体が固定されてないだけ、気持ちに余裕が出来たのか母と話しながら戦場を駆けまわっていた

４歳には本格的に武術を学び出し

６歳には初めて人の命を奪った

赤ん坊のころから戦場にいたからか対して罪悪感や不快感は覚えずただ人を殺したと言う実感があっただけ

こんな自分人としてどうなのとも思ったが、相手は奪うだけの獣、
人とは違うと無意識に分けていたんだと思う
８歳で将として戦場に出て母は偉大だと再認識し
語り出せば限がない
とにかくこの十年生きるために必死だった
それこそ前世を思い出す暇さえなく
「小狼何処だ―」
「お兄様ーどこですかー」
「おにーちゃーんどこー」
と親友と可愛い妹たちが俺を探しに来たようだ
とにかく孫策伯符　真名を小狼
第二の人生頑張って生きていきます

第2話

周囲は薄暗く、朝餉の準備が始まったのか調理場から煙が出て来ている

そんな中、俺は城の中には似て４歳からの日課である早朝稽古をしている

「はっふっほっ」

唐竹割りから左逆袈裟切りそして右袈裟切り

剣術においての基本唐竹割り、左右袈裟切り、左右逆袈裟切り、左右横一文字、突きこれらの動きを適当に組み合わせひたすらに体捌きを体に覚えこませる

武人において最も信頼できるのは自分自身

武芸や体づくりには余念がない

そして赤ん坊の時から戦を見てきた俺としては最も戦での生き死にを分けるのは体捌きの差だと考えている

戦場で真っ先に死ぬのは義勇兵だ

お袋は今でこそ働きが認められ俺が４歳のときに長沙の太守に収まり抱える兵は２万弱ほどになってはいるが元は仮の尉（現代で言う警察署長クラス）せいぜい数百人ぐらいしか兵がいなかった

それでも相手は所詮は武や知の心得のない賊や怪しげな宗教集団
常に鍛錬を欠かさないお袋の軍が負けるはずもなく前戦全勝
だが次第にお袋を恐れたのかいくつかの賊が徒党を組み千単位に膨
れ上がるやつも出始めた
そうなれば数百人しか兵のいないお袋の軍じゃ対処できなくなる
必然的に豪族たちに私兵を借りたり義勇兵を募集する事になる
義勇兵は武装させただけの農民だ
槍の突き方、陣形など知っている訳がない
そりゃ訓練はするがそれでもたかが知れている
そんな奴らが振り落とされる剣を突いてくる槍を降り注ぐ矢をとっ
さに避けられる訳がない
避けられなければ死ぬ
だから戦場では義勇兵が真っ先に死んでいく
自分の力で生まれ育った故郷を守ろうと言う心意気は買うがハッキ
リ言って死に急いでいるようにしか見えない
俺はすでに武人として生きることを定められている身だ
そりゃ戦は好きだが死にたい訳じゃない

だから少しでも長生きできる様に体に覚えこませる

槍や矢が来ても避けられるように

それに武人なら武の頂と云う奴にも興味があるからな

と東の空を見上げれば太陽がいい感じに登っており

食堂からは楽しげな声が聞こえてくる

俺は地面に置いた古錠刀の鞘を広い納める

朝餉を取るために食堂に向かう

とりあえず、お袋を超えることを目標にしとこ

第2話（後書き）

現在迷走中
勢いで書きだしてますけど文考えるのって大変ですね
作家さんたち本気で尊敬しちゃいます
とりあえず次話からちゃんとした物語にしていきたいと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2805z/

真・恋姫?無双　～小覇王伝～

2011年12月11日03時55分発行